

---

# 狂気とその行き先

悪食童子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

狂気とその行き先

### 【Nコード】

N8560P

### 【作者名】

悪食童子

### 【あらすじ】

オムニバス形式でお届けする予定です。ただし、予定は未定・・

内容はホラー？グロ描写も多少ある予定なのでお気をつけて。

作者のSAN値がたまり次第、投稿という形になるかもしれません

なお、この作品が処女作です。

温かい目で見守っていただければ幸いです。

あと、応援やら「こう書いた方がいいんじゃない」などのご指摘は  
ビシバシお願いいたします。

うぜー やら 中二乙などといわれるとへこみます 尋常じゃない  
いほどへこみます。

取り扱いにご注意ください。

## 笑い声（1話目）（前書き）

この作品には残酷描写がある場合があります。  
ご注意ください。

## 笑い声（1話目）

時間は現代。

場所は東京。

それは、ある一人のサラリーマンの狂気。

そのサラリーマンの名前は種田<sup>たねだ</sup> 哲<sup>てい</sup>なんの変哲もないサラリーマンだ。

身長は170、体重は65 趣味は、特には無い。 特技も特にない。

まさに「仕事が趣味」 というやつだ。

毎日、毎日家を同じ時間に出て 毎日、毎日、同じ時間に帰ってくる  
まるで労働という機能しか持っていないロボットのようだ・・・。

ただ、彼が

人と違っているのは

人の笑いに過剰に反応し自分は楽しくなくても笑ってしまう。  
という異常である。

その異常の原因は過去にさかのぼる・・・

>>side 種田<<

<過去編>

僕は小学5年生の3組の種田哲だ。

ちょっと引っ込み思案なところもあるけど、普通の小学生だ。

このころは、東京に引っ越す前で。

どこか、地方に住んでいた。

「おい哲ー。遊ぼうぜー」と、番長的な立場に立っている武藤勝むとう かつが呼びかけた。

「うん、いまいくー」と無邪気に走っていく少年。

二人の仲は非常に良かった。

彼の異常はどこから始まってしまうのか　そして、どこに向かうのか。

それは、ある日

たまたま武藤勝の機嫌が悪かった日。

そう・・ただ、ただそれだけだったあの日。

全ては変わってしまった。

その日は哲と勝が二人で家の近所の森で遊んでいた。

勝がいきなり、森の中へガサゴソと入っていく「どうしたの？勝君？」

「何かいるんだ。何だろう？わくわくするなあ」と意気揚々と森の中へ分け入っていく。

「ねえ、変なの出たら嫌だし帰ろうよう・・」

「うるさい、行くぞ。」

そして、勝は見つけた。

死にかけている一匹の黒い子猫。

首輪は付いていない。野良猫だろうか。痩せこけていて、びっこをひいている。

おもむろに勝が黒い子猫をつまみあげた。

「なんだこいつ、きもちわりいな　しにかけじゃねえか。ケラケラ」と笑う。

ただ、優しい少年　哲には理解できなかった。

なぜ

なぜ、

何故、死にそうな子猫が面白いのか。

なぜ

なぜ

何故、笑っているのか。

哲は口をつぐんだまま、ずいぶんと森に分け入ってきたせいか暗くなりつつある森の地面を見ていた。

「勝君、帰ろうよ。暗くなってきたよ」と哲は消え入りそうな声で呟く。

この時、なにが勝の逆鱗に触れたのか分からないが勝は「おい哲。おもしろいだろ？この猫死にそうなんだぜ

笑え

よ」

と、笑いながら勝は言い放った。

哲は逆らうことができなかった。

この暗くなりつつある森の威圧感に押され

何もかもが怖くなっていたのだ。

なにもかもが怖くなっていた哲には勝の本心は見えなかった。

ただ、ただ勝は哲が怖がっているが、「何事も笑い飛ばせば大丈夫だ」と伝えたかっただけなのに。

機嫌が悪いせいで言い方も雑になってしまっているが、勝は伝わったものだと思っていた。

この、些細な

いや、多大な過ちが異常を作り出す。

「あははははははははははははははははは」

「そうだ！いいぞ！！もつと笑え ははっ」と楽しくなってきた勝がさらに発破をかける。

暗くなりつつある森の中に狂ったような笑い声が響き渡る。

なにが楽しいのか。なにが楽しくないのか。まるでわからない。

でも、みんなが笑っているから　きつと楽しいのだろう。

これが、異常の始まり。

過

去編  
終了<<



## 笑い声（1話目）（後書き）

はじめまして アクジキドウジ 悪食童子です。

小説というものを書いてみたくてですね 書いてみたんですが。  
んまーっ難しい！！

人生日々精進ですね！ 頑張って立派な物書きになれるよう頑張りますので。

応援、支持、罵倒 いや、罵倒は勘弁して・・・かんじちゃううう  
うwwww

馬鹿な話はおいというて、頑張りますのでよろしくお願いします。  
あと、happy new year

## 笑い声（2話目）（前書き）

つたない文章ですが、誰かに見られてると思うと怖いと同時にうれしく思います。

どうか、みなさま ダメな作者ではありますが  
みはなさないでください。

## 笑い声（2話目）

彼、種田哲たねださとしはそれから、東京に移り住み働くこととなった。

異常を抱えたまま

彼は、勝との一件以来 笑うということがどういふことなのか分からなくなっていた。  
なぜ、笑うのだろう

なぜ、楽しいのだろう

なぜ ナゼ 何故

孤独な彼の心に大きな傷跡を残したまま  
無慈悲な時間は彼の異常を隠したまま

そして、ある日

彼は無自覚のうちにケタケタ笑っていた。

それは、異常の自覚。

名づけるならば「無意識追随笑症」とでも言えいいのか  
人が、笑うと自分も無意識のうちに笑う  
そう、哲の「笑え」という言葉が彼の狂気の始まりだった。

会社においても

街に出ても

彼は笑い声を聞くとたびにケタケタ笑った。

「ケタケタ」

「ケタケタケタケタ」

「ケタケタケタケタケタ」

「ケラケラケラケラケラ」

ある日、彼は町で変な人を見かけた。

変な人は中年程の年だろうか、見ずばらしい服を着た

灰色の髪でオールバックにしている

目は血走り、ぎよろりとしていて

口は血彩を欠いたような色をして

髭は無精ひげ。黒のコートを着ていて　よろよろとこちらに歩いてくる。

その人は哲の前に立つと　こうささやいた

「やあ、はじめまして。　道に迷ってしまつて・・・」

「どこにいききたいのですか」

「どこにも行きたくはないのだよ。　ただ行くとすれば、行かなければならない場所かな」

哲は、変な人だなあと　思い　警察にまかせて　そうそうと立ち去ろうとした。

「すみません、僕では力になれないと思うので警察に聞いてみたらどうですか？」

「まあ、いい。　夢で逢おう」

哲は、ああ狂ってる人かと　気にせず立ち去った

その男が背後でクツクツと声を殺して笑っているのを見ることもなく。

哲は家に帰り、そうそうに寝ることにした。  
そのとき、さっきの出来事を忘れていた。

>>side dream<<

彼は小学生の頃の姿をしていた。  
場所は昔、転校するまえの勝たちと通っていた小学校。  
時間は、放課後だろうか 周りには誰もいない。

彼がふと教卓の方を見やると さっきの変な人が立っていた。  
「やあ、また 逢いましたね。」

「あなたはさっきの人？」  
「はい、そうであり そうではありません」  
などとわけのわからないことを口走る変な男。

変な男はつづけて こうつぶやいた。

「君はMなのかね？ みんな君を見て笑っているんだよ。  
それなのに、君は笑っている。 楽しいのかね？ うれしいのかね？」

そういつて彼はクツクツと笑った いや、嗤った。

>>side out<<

哲が夢から覚め、厭な夢を見たとぼやき。仕事に行くことにした。

びしっとスーツを着込み、ボールペンを胸ポケットに挿し彼は家を出た。

空は青く 風は優しく 人通りはいつも通り多かった。

彼が会社に向け歩いているといつも通り 笑い声が聞こえてくる。彼はそれに反応し 笑った。

するとドンツと人とぶつかった「すみません」といい立ち去ろうとすると昨日の男の声があった

「何がおかしいのかな? みんな、君を見て嗤っているのだよ」

哲はぞっとした。

周りの人がこちらを見て嗤っている気がする。

「けらけらけらけらけら」 「あははは」

「けたけたけた」 「クツクツクツクツ」

「げらげらげら」

彼は耐えきれなかった。 自分を見て 全ての人が笑っている嗤っている晒っている

「見るなああああああ 俺を見て嗤うなああああああ!!」  
彼の怒声が街に響く。

「けらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけらけら」

「げらげらげらげら」

「けたけたけたけたけたけたけたけたけたけたけたけたけたけた」

けたけた」

そして、もっと大きくなる笑い声。

彼は、人のいないところに向けて走り去った。

彼は、人気のない丘の上の公園にいた。

どうやってここまでたどり着いたのか記憶にない。

ここなら笑われることもないと一息ついた　その時

「けたけたけたけたけた」

彼は、どこからか聞こえてくる笑い声を聞いた。「けたけたけたけたけた」

周りを見渡しても「けたけたけたけたけた」どこから聞こえてくるのかわからない

人の気配は「けたけたけたけたけた」ない。

いくらさがしても「けたけたけたけたけた」消えることのない  
笑い声

「けたけたけたけたけた」

彼はもう、狂っていた。「けたけたけたけたけた」

笑い声のでどころを探しているうちに彼は気付いてしまった。

この声は自分の耳から聞こえていることに。

————彼はおもむろに 胸からボールペンを取り出した

そして震える手で 耳に向けて全力で突き刺した————

「けたけたけたけたけた」

————まだ、聞こえる もっと強くも  
っと強く

き刺した————  
なんども何度も自らの耳に向け突

「けたけたけたけたけた」

「けたけたけたけたけた」

「けたけたけたけたけた」

「けたけたけたけたけた」

「たすけてたすけてたすけてたすけてたすけて」

彼の「たすけて」は笑い声の中に埋まり 人の気配のない公園にさ  
さやくように響く。

そうして、彼は笑われながら 笑いながら帰らぬ人となった。



――狂気はやがて凶器へと変貌する

そうして、**狂気は新たな被害者を探しつつける**

## 笑い声（2話目）（後書き）

アクジキドウジです。

オムニバスとしては、これで1話閉幕です。

自分の思考を言葉に変え それを文字にする  
これはとても大変なことだと実感しました。

みなさん凄いなあと尊敬してます

読んでると「俺にもできそうやん」なんて思っていますが  
やっぱ難しいですねえw

というわけで、今回もびしばしご指摘ご指導お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8560p/>

---

狂気とその行き先

2011年1月8日22時51分発行